

原発 そこが問題だ

第6号

2022年1月7日

原発反対の会・吹田

wasser861.a@pure.zaq.jp

井上美和子さんのメッセージ(前号)によせて

前号(第5号)では、福島県南相馬市から綾部市に避難されている井上美和子さんからメッセージ《避難者の一人として今》を寄せていただきました。それに対して、以下の方からそれぞれの想いが寄せられましたので掲載します。

初めまして。コロナ禍でアッという間に12月になりました。必死に生きていますと、生活にゆとりがないと、10年は、速く経ちますね。粘り強く活動されていることに敬意です。地域はどこも高齢化で、私のような70代が多く子供はもちろん、働いておられる世代の姿が少なくなっています。政府は軍事費を増加し、地域福祉・社会保障・医療・介護・教育・保育・公衆衛生、保健所などの人間に関わる予算を減らしてきました。中小企業・零細商店の街を支援する気はありませんね。潰れるところは勝手に潰れなさい…という感です。健康に留意されてよき2022年を迎えてください。
(大阪市・松本千賀子)

井上さんのお話の中で、水俣の「生活圏の中で起こる激しい対立」という言葉が印象的です。福島の場合は、避難を余儀なくされ、生活圏を超えて、「日本全体の生活圏の中」で「起こる激しい対立」なのだろうと思います。しかし、現実には、この「激しい対立」を抑圧する国家権力・電力資本の権力による(マスコミも含めた)深刻な問題が山積していると思えます。水俣病をはじめとした公害の記憶もまた薄れているのが日本の現状と思えます。戦争責任、過去責任も忘却され、歴史修正主義が国家権力・大資本の権力と一体となって市中を跋扈していることも同様です。
(京都市・重本直利)

あの日の記憶は鮮明です。守口の姉宅に居たのですが天井の吊下げ照明具が少し揺れました(まさか東北が震源地とは!)。帰宅してテレビの地震・津波の映像に驚愕しました。そして福島第一原発の大惨事発生です。あれから10年、復興・復旧はかなり進んだと。この目で確かめていませんがある程度は想像できます。

しかし、井上さんのメッセージを拝見して、改めて放射能事故の影響はどうなっているのか考えさせられました。未だに帰りたくても帰れないという「避難生活」の現実があるのに、福島県内でさえ、たった10年で「原発事故は過去のもの」として触れるのがタブー視されているとのこと。信じられない一言です。

私は井上さん達の子供の健康を守るための「県外避難」を勇気ある決断だったと考えます。そして、『ほんじもよお語り』の朗読公演を始め、語り部としての井上さんの諸活動が少しでも実を結んでいくよう願っています。

『MINAMATA』観ました。水俣病の悲惨を全世界に報じるユージン・スミスの写真が掲載される「タイム誌」に届くシーンが印象的でした。
(茨木市・内藤幸雄)

スタンディングアピールに参加下さい(JR千里丘駅東口・毎月11日17時~)

原発問題に対する国民の多くの“態度”“姿勢”困ったものですね。自民・公明政権は何があっても、彼らへの支持率が下がらない、腹立たしいそれのみですね。この体勢をいかに壊していくべきか、そのトータルな闘いの中で、原発問題を位置づけていくとすれば、どうなるのか考える日々です。

防衛費が年々増える、戦前回帰を思わせるようです。あんなに大きな犠牲をうみだしたのに、今はすっかり忘れたごとく。敵地攻撃をするような政府（アベはその先鋒）。原爆だって落ちてくるかもしれません。原発と原爆は軌を一にしているんです。そんな政府を支持率 50% で支える日本人、恐ろしい限りです。怒りたくも哀しくも、ある日々です。どうしたらいいのか、…です。ただくやしいです。

中国やロシアに民主主義が欠けていると非難しますが、日本も結果的には同じです。三権分立もへったくれもありません。実体は専制支配です。

寺山修司の「マッチ擦るつかのま 海に霧ふかし 身捨つるほどの 祖国はありや」の歌が思いだされます。
(静岡市・篠原三郎)

「原発 そこが問題だ」第 5 号（12 月 13 日）を拝読し、大変勇気づけられました。かねてより、「六ヶ所村の女たちのキャンプ」など、反原発・脱原発の運動で先駆的な活動を女性たちが展開してきたことを誇らしく思っていました。

いまここに、『ほんじもよお語り』の取り組みを知り、今だからこそ「向き合い」語り続けることの大切さを痛感しています。ありがとうございました。そして、共に闘うことをお誓いします。
(八王子市・宮崎 昭)

井上さんは「住民同士の分断」が、水俣では「生活圏の中で起こる激しい対立」を起こすと指摘されますが、原発は核発電であるゆえ、福島では「日本全体の生活圏」を巻き込む分断・対立になっていると思います。

国家・電力独占企業は、利害関係を持ちこむことによって、原発誘致で利益を獲得する土建業者たちと生業を失う農民・漁民をはじめとする地域住民、さらに原発誘致を拒否した地域住民を分断し、「激しい対立」を作り出し、また対立を利用することによって弱者の住民を抑圧してきたと思います。

そして、原発事故が起こったら、政府は、原発設置地域住民にはある程度の補償をし、それ以外の地域住民にはわずかな補償しかせず、さらに放射線量年間 20 ミリシーベルト以下の地域から避難した「自主避難者」には、無償住宅提供も精神的損害賠償（慰謝料）も数年で打ち切り、「避難の権利」を奪ったままです。福島県はあろうことか裁判まで起こして避難者を公営住宅から追い出しているのです。

さらに福島からの避難者と避難先の住民との分断・対立が社会的に引き起こされます。たとえば、原発事故の補償で金持ちになったとか、放射能がうつると子供がいじめられるとかの不当な差別は枚挙にいとまがありません。これらのことは、「日本全体の生活圏」の中で、被災者はもちろん、放射能被害を受け続ける被ばく労働者、原発設置地域以外の福島県住民や「自主避難者」たちが最も犠牲になり最も抑圧されていることを示していると思います。

井上さんが『ほんじもよお語り』をとおして福島に「向き合い続ける」のに呼応して、わたしたちが住民の分断・犠牲を許さず、国家・電力独占企業や「科学者」をはじめとする「原子力むら」と闘い続けなければ、私たちも分断され（今も分断されていますが）、何事もなかったかのように、権力に治められてしまうのではないのでしょうか。
(吹田市・青水 司)